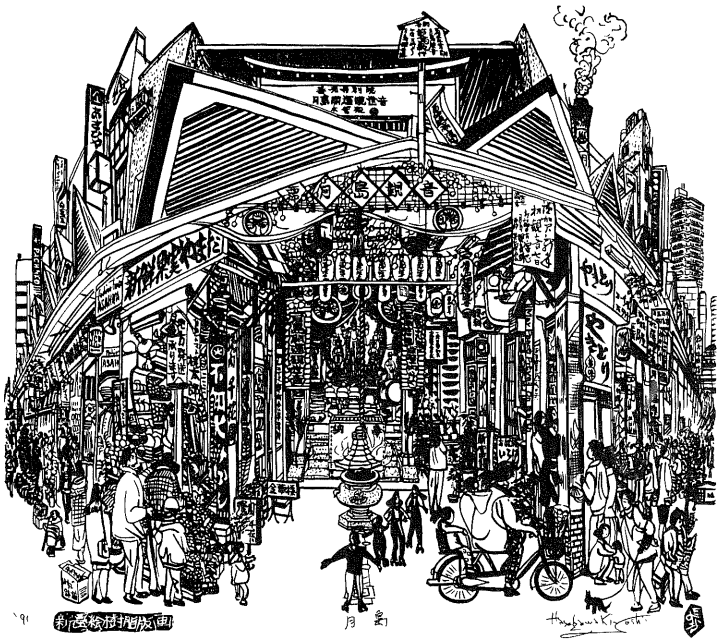
京橋の印刷

12月5日1997・No.99

東京都印刷工業組合京橋支部
〒104 東京都中央区新富1－16－8
日本印刷会館3F　電話 3552-1855
FAX 3297-3790

発行人　十文字　康雄



東京風景版画提供
（月島善光寺別院）
長谷川　清氏

デジタル化で思うこと

監査　宇津木　俊雄

金融業は、インターネットを利用すれば1／3の人員で運営できるといわれている。デジタル化も業種によっては大変便利である。はたして印刷業ではどうであろうか。手順としては、まず自社のメインの仕事で検証して、時間と経費と品質が保証されなければいけない。御存知のように、パソコンのオペレーターは文字組版を始め、製版から印刷までを考慮してカバーすることになるので、ベテランの組版工や製版工の知識が必要になる。設備投資は段階的にしたいが、作ったデータがはたして正確に出力出来るか、文字バケはないかを一々出力センターへ持ち込んでいたら理解度が遅くなる。そこで多数のパソコンと出力機のネットワークを組むことになるが、全体の構成が判るSEが必要である。3ヵ月くらいはトラブルの続出で、なにがオペレータのミスか、機器の故障か判断ができない。また、ソフト・ハードとも次からつぎへとグレードアップされるが、2年位はそのまま使いたい。つぎに若い人の文字組版の知識が問題になる。活字ではあり得ない文字のツメやあきを勝手にやるので、組版の体裁が悪い。組版、製版、印刷も何十年の技術の積み重ねで培ってきたものを、若いパソコンオペレータに短期間に理解させるのは無理である。そこで、最低のルールと仕組の教育資料が必要になる。ぜひ組合で作りたい。最後になりますが、デジタルは早く全体を理解したほうが勝ちである。何れにしても営業部員の教育が最後になりそうである。

永年勤続従業員表彰式

於・銀座東急ホテル

10月16日(金)、午後6時から隔年に開催される京橋支部・永年勤続従業員表彰式が銀座東急ホテル・2階「松風の間」に於いて行われました。

今回の被表彰者は、5年勤続74名、10年勤続17名、15年勤続17名の計108名で、表彰式へは内38名が出席しました。

表彰式は、永井副支部長の司会で進められ、榎本副支部長が開会の辞を述べ、続いて十文字支部長が挨拶し「厳しい経済環境の中にあるが、〝企業は人なり〟の言葉を胸にきざみ、これからも頑張っていただき度い」と励ましの挨拶がありました。

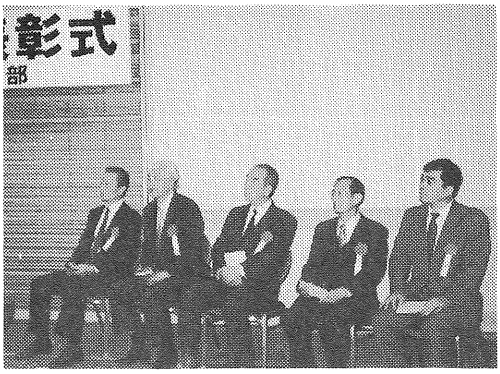
引続き表彰状と記念品の贈呈は5年を代表して㈱久栄社の谷戸源明様に、10年を代表としてオカムラ印刷㈱の大槻昭彦様に、15年を代表して高千穂印刷㈱の石井淑人様にそれぞれ壇上で十文字支部長より手渡されました。

続いて来賓挨拶では、東印工組副理事長田畠一弥殿、中央区長矢田美英殿、中央区工団連会長平林智司殿の3方が祝詞を述べられました。

この後、被表彰者108名を代表して、高千穂印刷㈱の石井淑人氏が登壇し、十文字支部長へ謝辞を述べ、山崎副支部長の閉会の辞により表彰式は終了しました。

この後、祝宴へ移り、東印工組常務理事篠倉正信殿の乾杯の音頭により一同力強く〝乾杯〟を唱和し賑やかな歓談へと移りました。

宴途中で中央区商工課長斎藤裕文殿が挨拶をされた後、工団連の平林会長がご自慢の〝浪曲三題〟を披露、祝宴に花を添えました。ほぼ一時間に亘り続いた祝宴も8時過ぎとなり、青柳副支部長の中締めで終宴となりました。



業界の基礎築く活字発祥の京橋

斎藤喜徳・京橋支部顧問に聞く

風土が持つ魅力

聞き手　栗原浩・日本印刷新聞社社長

京橋支部顧問の斎藤喜徳氏は大正四年二月、中央区の新富、日本印刷会館の向かいで生まれた。今年八十二歳。英文組版およびその印刷では日本有数の腕前をもち昭和五十二年労働大臣から「卓越せる技能者」、六十一年勲六等単光旭日章を受賞している。京橋支部には十二歳のときから厳父の使いで出入りというからキャリア七十年、業界の生き字引でもある。コンピュータによる情報革命で五〇〇年余の歴史をもつ印刷は激浪をかぶっている。プロとしての心がまえや歴史、文化を日本印刷新聞社の栗原社長からきいていただいた以下は抜粋である。

活版の世紀ひらく築地活版

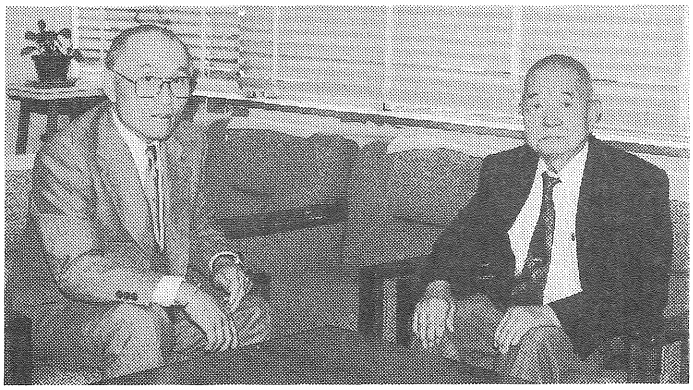
――銀座、木挽町、築地といったこの辺が丸ビルや官公庁へ御用聞きするのに便利な立地だったせいでしょうか。

斎藤　そうだと思いますね。

――それで数が増えた。

斎藤　東京築地活版所があって、活字も大量に手に入るので小さいところもどんどう集まって来て、木挽町はどこへ行っても印刷屋の巣だと云われました。東京駅八重洲口付近も印刷屋さん多かった。関東大震災後に、新富を飛び越して入船町、新栄町、湊町に業者が移動してきたのじゃないかと思いますが、築地活版に近い築地、木挽町、銀座はとりわけ便利でした。インキも西川求林堂が、築地活版の近所で現在の東京三菱銀行築地支店のところにありましたね。

店主の西川求林斎は幕府の御殿医。あの辺は、



福沢諭吉の先生の桂川甫周が住んでいたり、新しい知識人が集まっていたんですね。福沢諭吉は咸臨丸の通訳を志望するのですが、ジョン万次郎が通訳でいたので従卒で行ったといいます。これも諭吉の先生甫周のご兄姉が軍艦奉行の木村摂津守の奥様なので先生のお骨折で船に乗れた。外国の知識にも明るい西川求林堂は印刷機械とかインキを輸入していたのです。

――さっきのお話のように京橋区は業者の数が多かったのですね。

斎藤　やっぱり京橋支部と神田支部は同業組合で双璧でしたね。なにかあると、いまの千代田支部、当時の神田支部が京橋支部ということで、それで大体、支部の指導者という人は、普選前は区会議員の人がみんな役員でした。「万安桜」で集まりがあると、子供だった私でも実にびっくりするほど弁の達者な人が多かったです。

地場産業としての開拓期

――それは斎藤さんが幾つ頃のころですか。

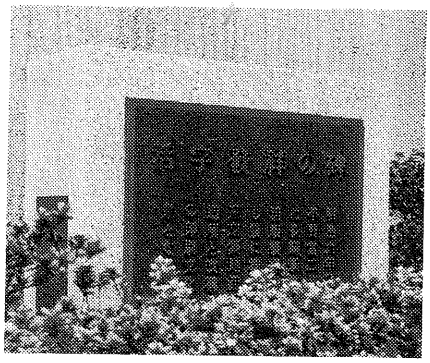
斎藤　十二、三歳でした。大体、関東大震災後でしたが震災前もありました。この新富地区のその頃の印刷会社というと、増田さんが中央税務署の右側で後に勤労福祉会館の横手に移転して支部長もしていた。震災後中屋三間さんが来たんですよ。川淵から焼けて税務署右手一帯にかなり広い場所でした。長崎から印刷所一軒買ってそれをそのまま持ってきた。三間印刷はオフセット以外に活版もかなりやっていました。この新富あたりには結構大きな印刷所があった。湊町ですと大倉印刷（大倉書店の印刷所）があって、従業員が百人以上いましたね。

当時は、小さな印刷所でも墨インキは求林堂、黄インキは山本インキ、赤と藍は東洋インキ、ダブルトーンインキは諸星インキといった具合にそれぞれ買いにいった。

――ロットはどのくらいだったのですか。

斎藤　子供の私が小僧つれて持って返れる量ですから、三缶か四缶でしょうね。活版インキですからいくらもインキがいりませんでした。昭和の初めころ、そろそろオフセットが出てきましてね。写真原稿がオフセットで使えるようになったのが、昭和十年後です。昭和初年頃は、活字からコロムペーパーに転写したものをジンク板に移すという方法でした。これは京橋では西川求林堂に行かないとなかった。使うインキ（輸入品）が固いインキでしてね。うちでは女学校の唱歌の教科書の印刷で製版するのに使いました。

歌詞の印刷は秀英書体の十二ポイントで奇麗でした。



関東大震災で築地活版衰退へ

――震災のときは、京橋支部のこの辺は焼けたのですか。

斎藤　震災のときは銀座からこっちまで全部焼けました。築地活版も全部焼けました。地震は昼にあって火事はなかったのですが、夜になってから銀座方面と茅場町方面からの火が高熱と強風で燃え移ったのですね。午後九時過ぎに木造の壮大な築地本願寺が火柱がたって焼けおちる最後は、今も脳裏に焼き付いています。

――震災後はほとんど元通りになったのですか。

斎藤　大きな建物で再建し、流石は築地活版たいしたものだと、子供ながら思いましたが、ただいけないことは、秀英舎なんかもう、榎町などにこちらから工場を移したでしょ。それだからみんな焼けないのですよ。それでガクンと差が付いたのでしょうね。

――震災前に大手さんはもう移ってたわけですか。

斎藤　事務所などは残っていましたけれども、震災で焼けても直ぐ直せますからね。築地活版はまた、経営も旧態依然としてたことです。

印刷大手の風貌もつ築地活版

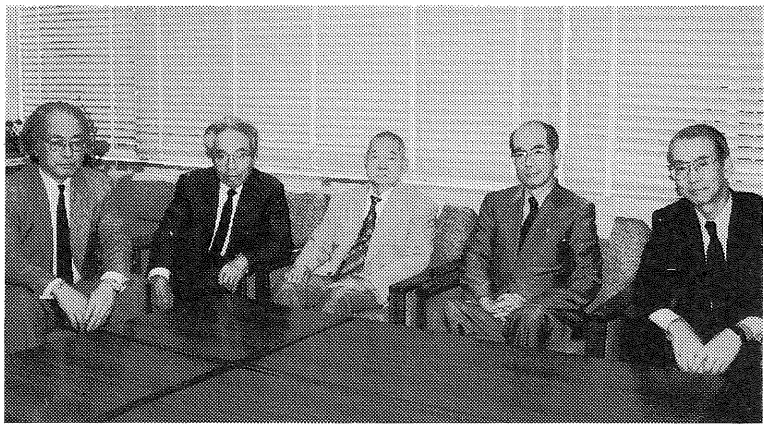
――築地活版は活字だけでなく、印刷もやっていたわけですか。

斎藤　そうです。印刷もやっていた。それに営業陣が良くなかった。印刷機械も写真版を印刷するには能力不足で後で、中馬の二回転印刷機を導入して、鉄道省の写真入の大きな仕事もしたようですが、全面的に機械の更新をしない内に終った。

――良くなかったというのは威張っていたのですか。

斎藤　活気がなかったですね。子供のわたしがそう感じていた。最後になると、経営の上層部が宗教にこって入口をセメントを塗って塞ぎ、横の入口からお客を入れました。社長が宗教にこって方角が悪いからということで、子供心にこれだけの会社がそんなことやってんじゃあ、もう駄目だと思いましたね。とにかく活版だけに力を入れ過ぎて、ほかの方がね。活版の方は良かったですね。ベントン彫刻機を印刷局の後に、三省堂が入れる前に入れました。私の父が、築地活版には欲しいもの、もうなにも無いが、五千円で売れるというなら借金してもベントン彫刻機が欲しい、と一言いいましたよ。

あれが大会社に行って、そこの活字がうんと良くなったのですよ。それほどに活字方面には、築地活版はうんと力を入れたのですが、印刷全般はカラーが増えてきたりして、活版以外のものにどんどん着目した競争相手の大手に築地活版は大きく水をあけられていくのですね。それでも未だ内福だったのでしょうか。活字は築地活版でなければという通念が色濃く文字印刷の本流でした。また、ほうぼうで売れてましたが、やっぱり関東大震災で片や無傷、これが築地活版が悪くなる根本原因だったのでしょうね。



――その後は昭和初めからの不景気になって、戦争になっていくわけですが、不景気時代はどうだったですか。

斎藤　不景気時代は、大日本も凸版もみな同じで悪かった。秀英舎と日清印刷が合併して大日本印刷になったのですから。

暗かった昭和恐慌時代

――不況だ、不況だ、といってますが、いまのとあの頃のとでは。

斎藤　ええ、えらく違いましたね。細川活版の社長の北川さんが、「治作」での京橋の長老会で、昭和の不景気時代を回想し、外から会社に帰ってくるのが辛かった、工場の工務が今か今かと仕事を待っているようで、客先から手ぶらでもどる自分は本当に辛かったといってましたね。それが戦争が始まると俄然変わりました。

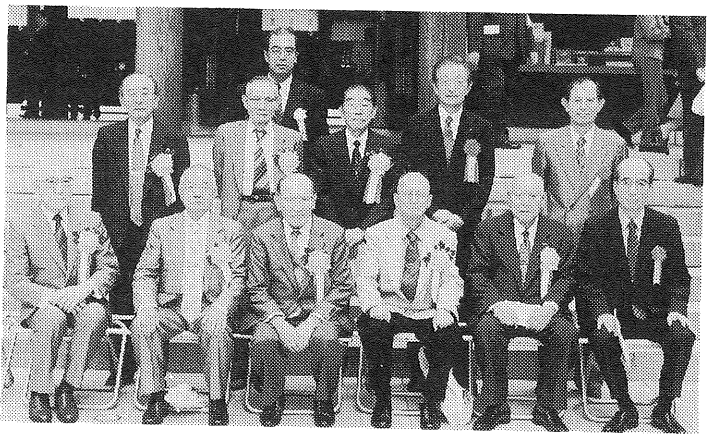
昭和十三年築地活版は駄目になるのですが、野村宗十郎さんが生きてればなんとかなった。戦争さえ乗り越えれば築地活版は、きっと大日本、凸版、共同と同じくらいにやれたと思いますね。戦争という大きな変動があるときは、それを契機に駄目になる会社がある一方で、また、大きくなる印刷会社が育つのですね。

（以下次号へ続く）

〝敬老の集い〟

恒例の組合本部〝敬老の集い〟は、9月19日(金)、明治神宮参集堂で開催され、各支部から91名の方々が元気な姿を見せました。

当支部役員からは、十文字支部長と小倉区長(本部厚生委員)が支部諸先輩に随行して出席しました。



写真前列右より、十文字支部長、石澤様、安西様、藤井様、斎藤様、長崎様
中列右より、篠倉常務理事、田島副理事長、小林様、酒井様、永井様　後列、小倉区長

東印工組人材育成事業 電子化教育研修会開催される

京橋支部を対象とした東印工組本部による電子化教育研修が去る9月16日から24日までの1週間にわたり実施されました。

日程は次の次第で

◎経営者向けセミナー　定員30名
＊9月16日(火)1日3時間
＊中央区立女性センター

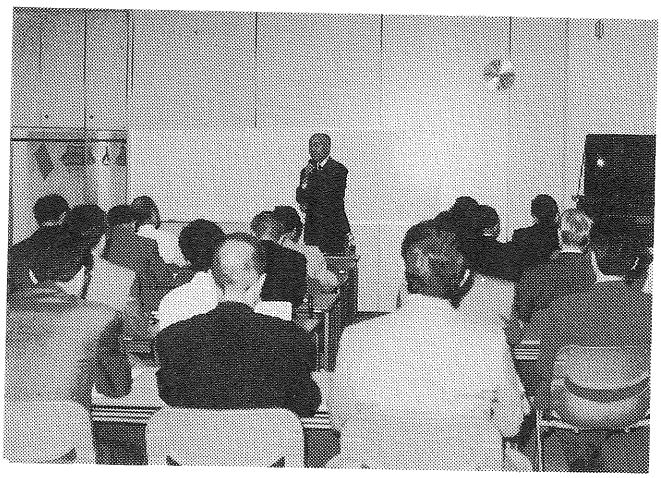
◎営業マントレーニング　定員10名
＊9月24日(水)1日7時間
＊アップル・トレーニングセンター

◎実務者トレーニング　定員10名
＊9月17日(水)～20日(土)4日
各7時間
＊アップル・トレーニングセンター

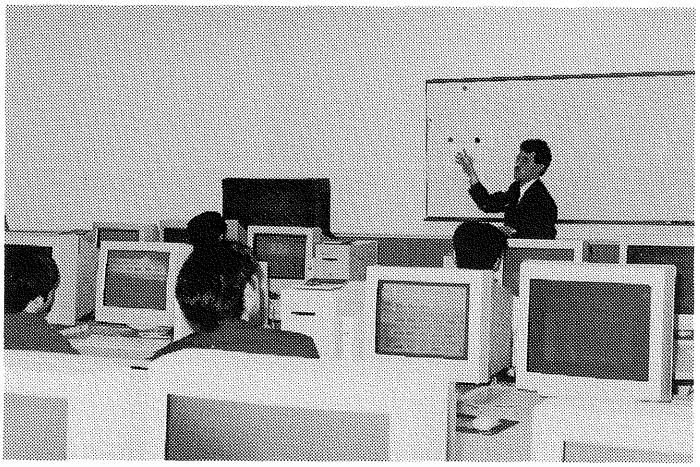
京橋支部の参加成績は経営者44名、営業マン20名、実務者10名と東印工組全支部中でもダントツの多さで、定員不足の他支部のわくを穴埋めする盛況となりました。これは当支部の皆さんの電子化教育に対する意欲の高さが根底にある結果と言えましょう。ご承知のように京橋支部では去る6～7月に支部独自のDTP集中研修会が好評裡に実施されておりますが、支部員がさらにさらにステップアップをと捉えて頂いた結果とも思われます。

支部執行部では経営者セミナーが前回の二番煎じとならぬよう、本部方針のカリキュラムに京橋独自の内容を提案し組み立ててもらいました。その結果講師は熊本の㈱林田印刷社長・境祐一郎氏を講師に迎え、電子化導入で成果を挙げている立場から多彩な経験資料をベースとした実践的な講義を拝聴することができました。営業マン・実務者トレーニングも一人1台のMAC操作による少数研修であったために中味の濃い内容となりました。

本部の電子化教育事業は都の中小企業活性化対策事業の助成を受け、来期も実施される予定



であり、これからもさらに成果を挙げるためには単に受動的に講義を受容するのでなく、こちらからも積極的な要望を提案してゆくことが大事であると痛感した次第です。



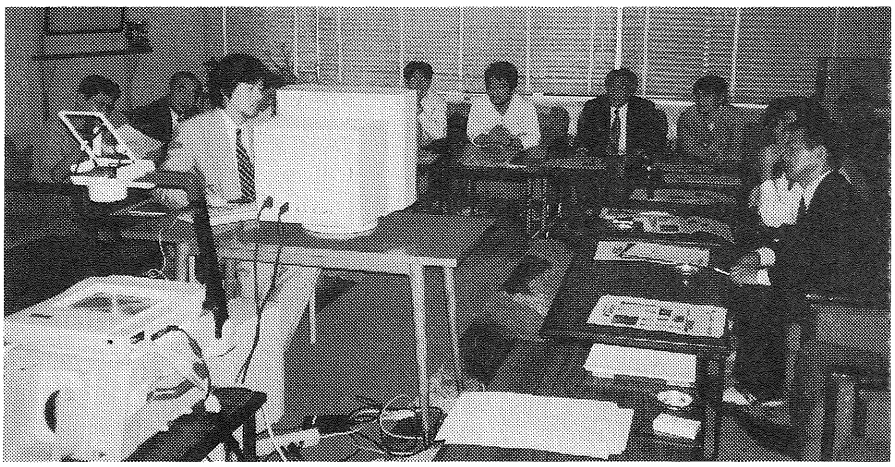
日本語組版DTPソフト「エディカラー」の研修会開催

去る9月26日15時より、部長・監査・地区長会において承認された日本語版ソフトの研修会を、支部会議室にて開催した。

欧米系のページメーカー、クォークエキスプレスなどの日本語版吹替えソフトでは、日本語組版ルールに則った高品質の頁物組版は出来ない。そこで日本語専用組版ソフトの数ある中の一つで、住友金属システム開発㈱の「SMIエディカラー」を取り上げて検証研修会をおこなった。

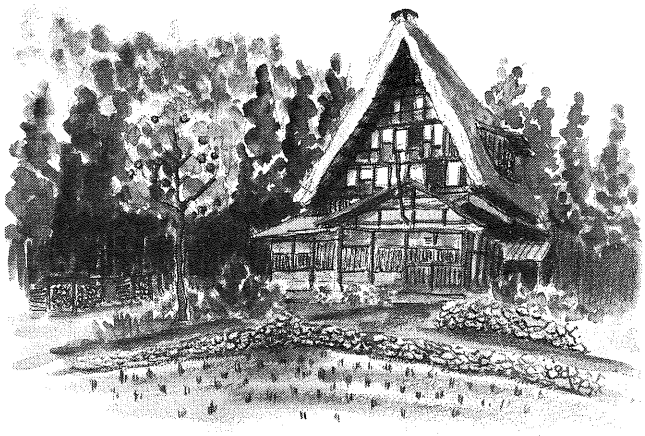
このソフトは、電算写植システムをベースに一九九五年フルカラー日本語ページレイアウトシステムとして「SMI EDIAN PLUS」の開発のノウハウを生かして作られた。外国製のDTPソフトでは難して組版、表組、約物処理、ツメ組が効率良く組めるということで、これらを実演で実証してもらった。また、高い日本語組版能力とオープンプラットホーム（WindowsでもMacintoshでも使えてデータ交換が出来る）の採用と、Post Script出力に最適化されており、どのセッターからでも出力出来る（出力センターでもカバーしている）環境にある。

21世紀に向けたデジタル化への対応を視野に入れた研修会として、約20名の参加を得て成功裡に終了した。



地区だより

銀座地区会親睦旅行



銀座地区会恒例のの平成九年度親睦旅行は十月十日から十二日にかけての二泊三日で奥様連四名を加え総勢二十二名で白川郷合掌集落により高山、奥飛騨へ紅葉狩りの旅行をした。

第一日目　羽田・城端・井波・薬師温泉

羽田発九時五十分の全日空883便が定刻を過ぎてもなかなか出発せず、どうかしたのかとやきもきさせられたが二十分遅れの十時十分に滑走を開始し離陸した。全ての予定が二十分遅れになるものと思っていたら定刻無事富山空港に到着した。航空機の発達で飛行時間が縮まり少々の遅れは取り戻せるらしい。途中機内からは北アルプスの山々が雪をいただき美しく見えた。富山空港からは待機していた観光バス（後部にテーブルと対面席のあるサロンバス）に乗り込み富山ＩＣより東海北陸自動車道を福光でおり一路昼食の地城端に向かう。途中ＪＲ城端線と並行して走っていたら珍しく蒸気機関車が走っていた。城端の町外れ理久にある「かわ久」で昼食をとる。酒豪揃いの我が会では出された日本酒が気に入り早速一本別途購入しバスに積み込んだので後部のサロンはたちまちサロンバーと化した。お酒の銘は「若鶴」、辛口の飲みやすい酒であった。昼食後再びバスに乗り城端町の中心部にある曳山会館に向かう。城端町は最近小京都として脚光を浴び漆工芸で何度かテレビに登場したところであるが、元々は浄土真宗の善徳寺の門前町として栄えた町である。曳山会館には毎年五月十四・十五日に行われる神明宮の例大祭に使われる傘鉾・庵屋台が展示されている。何れも伝統の工芸技術を以って作られた見事なものである。城端町歴史館として「蔵回廊」を併設している。善徳寺は文明三年（一四七一）本願寺第八世蓮如上人が金沢に開いた寺で福光に移り永禄二年（一五五九）に現在の場所に移築された。蓮如はその後大阪に出て現在の大阪城の場所に寺院（石山本願寺）を建て、信長・秀吉と交戦した本願寺中興の僧侶である。城端の町は現在バスがすれ違いが出来るようにと道を拡げる工事をしていたが小京都と言われる町の風景も随分と変わり公害や交通事故が増えないように充分な配慮が必要だと思う。城端（じょうはな）何とも聞きなれない町は縄文時代から人が住みついたと考えられているが時代を経て室町時代に荒木大膳という武将が城端城を築き、武士が集まり次第に町が出来た。この町の名前が城ヶ鼻と書物に書き込まれたが江戸時代になって城端となったといわれている。室町時代以前は公家の荘園になったり、京都の仁和寺の寺領となっていたこともあった。これが町の名前の起源である。

城端の町を後に一路彫刻の町井波に向かう。井波は明徳元年（一三九〇）本願寺五世の綽如上人の開いた古刹瑞泉寺の門前町である。境内には井波彫刻の祖といわれる田村七衛門の彫った「獅子の子落とし」の豪華な彫刻のある山門＝別名「菊の門」があり北陸一の規模を誇る大寺院である。ちょうど拝観に訪れたときには境内で幼稚園の運動会が行われていてしばし拝観の歩を休めて見入っていた。又、瑞泉寺は後小松天皇の勅願所としても有名である。井波の町の発達は瑞泉寺と共にあり江戸時代の伽藍彫刻を受け継いだ木彫りの町である。門前には沢山の彫刻屋さんが並びいろいろな作品を展示即売

していた。欄間彫刻は何処のお店のものも素晴らしく値段の方も大変なものらしい。

井波からは小高い閑山寺公園へと行く。ここからは全国でも珍しい集落である散居村が展望出来た。一軒一軒の間が離れていて家と家との間は富山の穀倉地帯だけに全て田圃と畑であった。都会ではとくとお目にかかれない眺めである。散居村を展望の後は本日の宿泊地の薬師温泉へと向かう。

庄川温泉郷の薬師温泉は庄川ぞいで山間の温泉であった。今夜の泊りは庄永閣で黄色のシャツを着た妙齢な美人の案内で予め定められた部屋へ通された。あまりに綺麗な女性であった為、あとで宴会に来るように誘っていた。一風呂浴びた後十八時より宴会が始まった。恒例の乾杯の音頭は今年喜寿を迎えた三青社の竹内氏にとってもらった。宴会は若いコンパニオン三名と昨年は入れなかったカラオケを使い賑やかに進行したが先ほどの到着時に約束をした黄色のシャツの女性が今度は和服姿で現れ一同吃驚した。聞けば当館の若女将との事で一同妙な納得をした。宴会は前親睦会大幹事の井上製版の井上社長の音頭で中締めを行い終了した。山間の川の辺の旅館なので外出しようにも行き先はなくコンパニオンに誘われるまま旅館のカラオケで二次会へ行く者と麻雀に興じる者とに別れたが奥様連は全員部屋に入り全員が按摩をとって就寝したとのことであった。

サルビアの　朱色目に染む　旅ごころ

第二日目　薬師温泉・五箇山・白川郷・高山

朝食後八時半に旅館をたち庄川沿いの道を岐阜方面に向かって走り越中五箇山へ行く。源平の時代に源氏に追われた平家の落人が飛騨の白川郷より更に奥に入り隠れ里として村落を為した所である平・上平・利賀の三村を纏めて五箇山と呼んでいる。近年世界文化遺産に指定された為、観光客が以前より増えたそうである。屋根が茅葺で丁度人が手を合わせ合掌している様に見えるので合掌作りと称されている。長い間他と隔絶した秘境となっていたので独特の文化が形成され現在も多くの伝統的な行事やコキリコ節や麦屋節等に代表される民謡が唄われている。平村の村落を一軒一軒見学して歩いていたが現実に人々が生活をしているので覗きをしているようで、土産物を販売しているお宅に行くとホットした気持ちになった。五箇山から白川郷に行く途中で国指定重要文化財の岩瀬家を見学した。九十歳近いご当主の説明では藩政の時代、加賀の前田家に属し火薬の原料になる塩硝を製造していた。塩硝の製造は五個山全村に命ぜられたので岩瀬家は製造された塩硝の取り纏めをし藩へ納入する役を仰せつかっていた。一階部分は総欅作りで座敷は書院作りである。二階から上は仕事場や倉庫として使用され外から見ると二乃至三階建ての様に見えても内では五階だてであった。点在する合掌作りの家屋を見ながら次に訪れたのは白川郷である。萩町城址展望台からの眺めは源平の時代にタイムスリップしたようであったが、ただでさえ狭い道に車が渋滞していて直ぐに現実の世に引き戻されてしまったが素晴らしい眺望に絵心のある人達がさかんにスケッチをしていた。昼食は合掌作りの建物を利用した食事処「基太の庄」でいただいた。昼食後は見学のため、しばし自由行動となりそれぞれがグループを作り見学に出かけた。酒好きのグループは八幡神社に行き濁酒を賞味してきた。濁酒の味は甘酸っぱく美味であるとのことであった。紅葉狩りであるが全山紅葉とはいかず所々赤くなっていたが殆どは黄葉であった。もう一週間位あとが見頃だと思う。白川郷からは国道一五六号線を走り御母衣ダム

を眺めながら一五八号線に入り一路高山に向かう。高山には定刻を少々過ぎて十六時頃着いた。本陣平野屋別館に旅装を解いた後宴会までの時間を利用して市中の散策に出かけた。高山は昨日まで有名な高山祭りが行われていて大変な数の観光客でごったがえしていたが高山陣屋と古い家並の残る上三之町を見学し名物の朴葉味噌（ホウバミソ）を試食し地ビールで喉を潤したがもう一つの名物である飛騨牛は一〇〇グラム一、〇〇〇円から七、〇〇〇円とのことでとても試食出来なかった。肉屋さんに高山に来る途中には牧場や放牧している処を見なかったと話したところ畜産農家は家の中で飼っているとの説明であった。高山の市内は車に乗るには狭くさりとて歩くには広く全ての名勝旧跡は見学出来なかった。司馬遼太郎の名著「街道をゆく」の飛騨高山の項には「飛騨にはゆるゆるとゆくことにする」と有るので一泊でそのうえ混んでいてはとても回りきれるものではない。三々五々と見学に出かけていた人達も帰り十八時三十分から宴会が始まったが、屋台会館、からくり会館、獅子会館と回ってきた人達もいて春慶塗の箸を求めた人も居た。春慶漆器の創始は約三七〇年前に国守金森氏の援護指導のもと塗り師成田氏と木地師高橋氏の両人が考案制作したものが始まりで「其の塗り色の清麗と其の形状の優雅」なのが世間の賞賛を得て発展し産出額も多くなったものである。宴会は芳賀洋紙店の浅見氏の音頭で乾杯を行い若いコンパニオンで今夜はカラオケは入れずにそれぞれ旅の感想と奥さんの誕生日を言って貰った。旅の感想の中では奥様連から昨夜の按摩に前迄揉まれたとの報告があり一同唖然とした。明朝の朝市の見物とこれも名物の高山ラーメンを食べに出たいとの要望で定刻より早めに宴会を終わったが生憎と夜半から雨になり外出した人達も皆早めに帰館した。

吾亦紅　合掌造りの　影残し

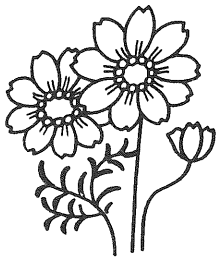
第三日目　高山・新穂高・富山・羽田

朝市の見学で全員早起きしたので朝食後定刻に出発する事が出来たが生憎と小雨がぱらついていて穂高での展望が危ぶまれる。国道一五八号線を富山方面に向かう。飛騨大鍾乳洞のある丹生川村、乗鞍スカイラインと合流しながら平湯を過ぎ新穂高温泉へ到着。昨夜からの小雨が降り止まず、それに増す寒さから全員ベストやコートを着重ね折角来たのだから取り敢えず行ってみようと新穂高ロープウェーイの麓駅に並ぶ、三十八度の勾配を中間地点迄登るが視界不良と乗り換えのロープウェーが一時間半待ちということで残念ながら麓に戻る。昼食は駅からちょっと下った穂高荘の「山のホテル」でとる。昼食から出発迄の時間を利用して川原に下り露天風呂に入った人もいたが定刻富山に向けて出発した。国道一五六号線を高原川と並行して神岡の町に入る。神岡は神岡鉱山のある処で国道四十一号線と合流して四十一号線を北上することになる。高原川は宮川と合流し猪谷で富山県となる。又、神岡から奥飛騨温泉口迄第三セクターの神岡鉄道が走っている。平行して流れる川は神通川となりやがて日本海にそそぐ。この川で採れた魚を食べイタイイタイ病が発生したといわれるが今ではカヌーやボートの練習場になり川の汚染も無くなったようだ。バスは富山市内に入り最後の見学先の「金岡邸」に着く。金岡邸は薬種商で、所謂富山の薬の製造元であった。邸内は製薬工場の跡と薬の展示場で新屋は総桧作りで明治天皇が休憩されたところであると説明があった。富山の薬は先用後利で預けておいて使った分だけ代金を頂くという江戸時代に出来、現在に至るも続いている我が国独特のクレジット商法である。漢方薬は飲み時が難しいといわれるが、食前とは食事のおよそ三十分前で、食後とは食事のおよそ三十分後、食間とは食事のおよそ二時間後とのことである。用法を間違えれば効くものも効かないのではないか。金岡邸の見学の後はいよいよ富山市の中心部、総曲輪にでる。総曲輪は富山市の銀座で都心も地方も何処でも喧騒と公害が多いが皆一様にホットした表情をしていた。日頃生活している処がより賑やかなせいだと思われる。バスは最後に富山きときと市場へよる。「きときと」とはこの地方の方言で新鮮なという意味だそうである。永見漁港で水揚げされた海産物が広大な建物の中に処せましと並べられ販売されていたが、バスガイドの説明で知った「白えび」を買いバスに戻り早速食していた。

富山空港からは全日空890便で十九時二十五分全員無事羽田空港に着き流れ解散となった。

秋桜の　静かに咲く日　飛騨の旅

（画　児玉　写真　瀬戸　俳句　恒本　文　山崎）



築地地区旅行記

三菱重工の創業は古く、一八七〇年（明治初期）九十九商会設立に始まるが、一八八四年、三菱社として造船工場設立をもって創業としている。現在十四の事業所に別れ文字通りの我国の基幹産業の一翼を担う重工業界の雄である。

今回訪ねる三菱重工の三原製作所は広島県三原市にあって、和田沖工場（20万坪）、糸崎工場（10万坪）、そして古浜工場の三ケ所に亘って拡大な工場である。その中で印刷関連の工場としては瀬戸内海に面している糸崎工場である。

一九四三年創業時は蒸気機関車のブレーキの専門工場であったが、一九五二年抄紙機、一九六五年段ボール製作機、一九六二年に印刷機械生産を開始したと云う。一九六七年（昭和四十年代）に入って菊全単色刷オフセット印刷機「ダイヤ一号機」を完成した。

現在年間生産能力として、枚葉印刷機480台、商業オフセット輪転機100台、新聞オフセット輪転機200台、大型抄紙機泪2台、段ボール紙製造機24台、段ボール製函機50台の能力があると云う。

我築地地区の面々は、九月五日朝九時に新幹線で東京駅を発った。午後二時、三原駅着で、三菱さんで送迎バスを出してくれ、約10分位で、糸崎工場の門前に到着、そこにはいかにもレトロな感じの蒸気機関車があって、我々を迎えてくれた。

事務所でビルの前でお決まりの記念撮影をして、中に入る。

初めに、枚葉機営業課長の塩谷さんより御挨拶があり、三原製作所工場概要を紹介するビデオを見せてもらった。

時計が三時を廻った頃、いよいよ工場へ向う。枚葉印刷機組立工場、印刷機械加工工場、電子印刷室、トレーニングセンターの順で広い工場群を歩いて廻った。とにかく拡大な工場であり、ゆっくり歩いていたのでは時間が無くなるので若干ハイピッチでの見学である。

これまで、小森印刷機工場、篠原鉄工所、桜井グラフィックと、毎年見学旅行を続けて来ているので、工場見学も大部慣れて来たようだ。

よく歩いて淡々として終った。業者としては、4/6倍判の輪転機は雄大な感じで見せてもらった。我々小企業者にとっては縁の薄いものなので、余計にあこがれに似た様な感じで拝見した。

この工場では基本の考え方として、二つの方向性を強調している。

①より美しく

機械信頼性の向上を通して印刷安定を高め実質的な品質アップを目指す。

②よりやさしく

オペレーターを調整作業や汚れ作業から解放し、印刷品質のマネージメントに集中できるオペレーション環境を創り上げたい。

としている。

DAIYA3Hなる最新鋭オフセット枚葉機（菊全）は最高印刷速度一六、〇〇〇枚／時をめざす。そのため給紙部、印刷部、排紙部にそれぞれ高速運転時の振動を半減されると云う。

見学工程の最終段階に入って、三菱電子印刷MD300と云う機械を見学した。ここでは10年来研究を重ねていると云う。オンデマンド印刷に対応すべく開発され、コンピューターで作成した文字や画像を直接用紙に印刷するものである。まだ市場に出す段階ではないが、その性能は、解像度800dpi、A4片面4色で毎分72枚の印刷速度、用紙はロール紙、印刷メモリ能力はA4フルカラーで一、〇〇〇頁が入力出来ると云う。我々がここへ来て事務所ビルで、ビデトを見ている模様をカメラに納め、そのスナッ

プ写真をこの機械に入力して「京橋支部御一行様大歓迎」のプリントを作って、他のカラー写真も含めA4のプリントを作ってみせた。この機械はA4で何枚かの4色カラーコピーの様な印刷物をオンデマンドに作って、即それをホチキス止めにして出来上りとなる。その中で一番の特徴は4色を出すトナーが粉末でなく、独自に研究した液体化されたものであると云う事であった。

午後五時工場見学は終了した。工場内を御案内いただいた方々と共に夕食をとりながら楽しく談笑することが出来た。その夜はJR三原駅前の三原国際ホテルに泊る事になっていたが若手のメンバーは夜八時じゃまだ眠れないと云う事で雨の中外出して行った。

翌朝、雨は止まず、益々本格的になってきそうだった。今日一日中は雨天を覚悟しなければならない。東京を出る前日、台風がそれて良かったと思っていたが、朝鮮半島より、低気圧来襲と云う事で生憎の雨となってしまった。若干重苦しい感じではあるが、予定通り三原観光の中型バスがホテル前にやって来た。バスには少しの傘しか用意されていないと云う事で、ビニール傘を買い込んで広島、山口方面へ出発した。

山陽高速道を一時間半程快走して広島市内へ入った。広島は川の町である。中国山地から流れ出た太田川が河口近くで猿猴川、元安川、京橋川、本川、天満川、太田川放水路と六本の川に分れ広島湾に注いでいる。市街地は都のデルタ地帯に形成されていて、川や橋の多い処ではある。従って市内観光は川と橋が目印になるほど川を伝い橋を渡ることが多いと云う。又市内には全国から集てめられた電車がそれぞれ昔のままの姿で路面電車として、活躍しているのが面白い。

さて広島駅、市本庁舎前を過ぎてバスで行く手に広島球場が見えて来た。しばらく行来けば元安川の流れが見えるはずだ。元安川をややゆっくり渡るバスの窓から有名や原爆ドームが目に痛い。この廃虚はさびた鉄骨、むき出しのレンガの壁が見る者の目に痛ましく映る。昭和二十年八月六日、世界で初めての原子爆弾がこの地に投下され地上六百米の上空で炸裂した。一瞬のうちに多くの人命と歴史に包まれた町並みが消失し去った。かろうじて形骸だけを留めた広島運業奨励館であったこのビルは、正に歴史の生き証人となって世界中にその名、その姿が轟き流布されている。本当にここに訪れる人々に戦争の悲惨さと平和の大切さを訴え続けているのだ。

何とも云えぬ感慨の想いで原爆ドームを眺めているうちに、バスは平和記念公園へ入って行く。ここは戦前は繁華街であったが、爆心地に近かったので全面的に壊滅したところである。元安川と本川が分岐した中州にあって広い公園に生れ変っている。

元安川は雨天のためか濁ってはいるが、滔々と流れている。五十二年前の被災当時は何万の人々が悪魔の炎の熱さに耐えきれず、この川に飛び込んだと云う。今は唯、黙然と流れるゆくのみである。何があっても流れ続ける川の流れの不思議さ、力強さ、清らかさ感じ乍ら小雨にけむる川面を眺めた。

大自然の摂理を大切に守り、世界に戦火のない平和な星として行かねばなるまい。そのために地球上の人間、一人一人がどれだけ、自己のエゴを克服して大自然と共に全ての生物と共に生きぬいて行くことが二十一世紀の課題ではなかろうかとも考えてみた。

我々の地元にも隅田川が流れているが、最近は隙無しで、ゆっくりと眺めることも無かったが、今広島に来て、仕事を離れているせいか、韓国の詩を思い出していた。

時調（李滉作）

青山はどうして永久に青々として
流水はどうして昼夜となく流れてやまなぬのか

われらも流水のように学びをやめることなく
青山のように若やいで生きよう……

長びく不況で悪戦苦闘の日々であるが、ともかく、川の流れのように逞しく、誠実と努力を重ねて仕事に精進してゆきたいものだ。

さて、ここ平和公園は、平和の灯、原爆慰霊碑、平和の鐘、原爆の子の像、嵐の中の母子像、祈の泉、資料館等多くの記念碑やモニュメントがある。

午前一〇時四〇分、資料館の前に我々を乗せたバスが止った。約一時間の予定で資料館内の見学と云うことになったが、皆さん熱心に見学されて、一時間たっても全員がバスの中にそろ

わなかった。正午少し前やっと平和公園を後に、宮島へ向った。

云うまでもなく、宮島は日本三景の一つとして有名である。一、三〇〇年の歴史を秘め平清盛がこよなく愛した信仰の島である。最近ではＮＨＫの大洞ドラマ「毛利元就」で更にその名を馳せている。名物もみじ饅頭、しゃもじがみやげものとして有名である。

が、残念乍ら雨の中ではゆっくり見物することはままならぬ。二時間以上も時間があったが、名物カキ料理をゆっくり食べて、一時間位で予定を切り上げることにした。

雨の山陽道へ戻って山口県へ入った。錦帯橋で有名な岩国を過ぎ、防府市内に入る。

多々良山を背景に約一万六千坪の広さを誇る毛利邸へ辿りついた。建物だけで一万坪、六十の部屋を容する江戸時代の御殿造りであると云う。（一九一六）大正五年に建造された。庭園は大きな池を中心にめぐる回遊式で、滝あり、せせらぎありで約二五〇種の樹木が四季を彩る大庭園である。天気が良ければさぞ和みながらの散策も出来得たのだろうが、雨の中では如何とも仕方ないとである―残念。

御殿の一部が毛利博物館になっているので入ってみた。所蔵品は約二万点、国宝七点、重要文化財八千点と云う。昔の毛利家の英葉をしのばせる部屋が並び、贅を凝らした建造美を見物した。中世の戦国時代にタイムスリップする様な、数々の展示場を見てまわった。

一つの国人集団が中国地方全土をほぼ手中にするまでに発展した毛利家の歴史に想いをはせた。

テレビ放送の影響もの凄く、最近はと云うより今年に入って見物に訪れる人が何倍も多いと云う。土日は観光バスのラッシュとなるとか。

毛利邸を後にして、国道九号線に沿って、常栄寺雪舟作庭園がある。大内政弘が明から帰国した画僧雪舟を招き庭園を作らせた。池泉回遊式庭園の真中に心点池、枯れ山水と枯滝を配して雪舟の水墨画の世界を表わしめいると云う。抹茶の接待もあるとバスガイド嬢が語るが、雨はしきりに降り続いていて、足元が悪いのでバスの中からの見物に終る。

次にバスが行くところは、瑠璃光寺の五重塔である。大内文化最高の華として西の京の歴史を語るにふさわしい場所である。高さ三十一・二米、檜皮葺きの総檜造り、五層の屋根はやさいし勾配でひろがっている。塔のそばに池があり、その池の面にゆらめく影の風雅さも又素晴らしい眺めであると云う。応久の乱で討ち死した大内義弘の菩提を守って弟の盛見が造営した。一四四二年嘉永二年の建立と云われている。檜皮葺きの屋根はめずらしいと云うその古い五重塔の上の部分だけ遠くバスの車中より一瞥して今日の見物観光の旅を終えた。

今日の宿泊地は湯田温泉である。約八百年の歴史をもつ名湯だとの事、その昔白狐が湯につかって傷をいやしたと伝えられる。山中ではなく、山口市内の国道九号を中心にその平地に約八十軒が集まふ大温泉郷であって、一日三、〇〇〇ｔの豊富な湯を誇る。

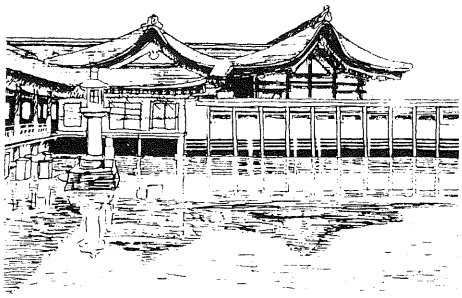
雨天のため予定を早目早目に切り上げたので午後五時前には湯田温泉のホテルに到着した。

温泉にゆっくり漬かって夜の宴を迎えた。和やかな談笑の中宴は盛り上り楽しい想い出の一夜を過したことと思う。

翌朝もまだ雨である。三日目はどこにも寄らず、東京へ直行である。小郡駅より新幹線に乗る。それにしても東京から山口は遠いなあと思う長い車中であった。

午後四時、無事、東京駅到着で工場見学旅行は終了した。

（記―春原）

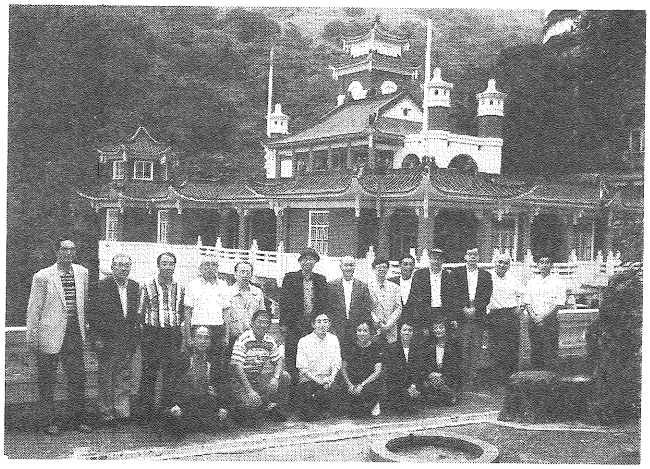


新友会香港・桂林の旅

新川地区は家族的なお付き合いが出来る会社が多く、隔年で行われている新川地区（新友会）の旅行会は皆さん楽しみにしておられます。今年度の旅行会は総勢20名の参加者を募り10月9日～12日の3泊4日の日程で香港・桂林への旅となりました。

今年の7月1日に中国へ返還された香港は、英国王室を象徴するエリザベス女王のレリーフ硬貨がデザイン変更され町中から王室の紋章が姿を消し、新生香港への期待と不安が錯誤しておりましたが、ツーリストの目で見る限りでは返還前となんら変わりはないように映りました。しかし英語と広東語が使われている香港において、公用語も北京語として学校教育に導入する等、しだいに中国色が濃くなってきているのも事実であり、香港で生活を送る人々にとっては、将来的に不安を隠せないがどうすることも出来ないジレンマに阻まれているようです。

さて我々新友会一行を乗せたCX509便は啓徳空港へスリリングな着陸。中国への返還式が行われたコンベンションセンターに隣接するグランドハイアットホテルへ荷を置き海鮮料理で有名なレイユームンにてエビ、カニざんまいの夕食後、ビクトリアからの一〇〇万ドルの夜景を満喫し第1日目を終えました。2日目は市内観光とショッピングを楽しみ夕方には今回の旅行の目玉となる桂林へと一路飛行機にて向かいました。桂林の玄関口は奇峰嶺空港で近年竣工されて間もない空港ですが、来年には国際空港として集客に力を注ぐそうです。香港から桂林に入るには同じ中国国内線の移動となるはずですが、一国二制度のためパスポートの提示と入国審査と出国税が必要となりいささか不思議な感覚（奇々怪々）になります。桂林に入るとまず目に付くのが自転車の多さと貧困な生活環境であり、深圳や上海などの経済地区と比べると貧富の差に改めて驚きを感じます。桂林では最大の楽しみは、桂林の郊外竹江の町から漓江の下流陽朔までの約45㎞を観光船で4～5時間かけて下る船旅です。太古の昔、海底であった石灰質の地面が隆起し、その後雨や川の侵食により形成された山々は山水画の世界そのものであり、自然の雄大さと不思議さに驚嘆いたしまし



た。下船後はバスにて桂林市内に戻り漢方薬店や伝統工芸品店を散策した後、広東名物仔豚の丸焼きをメインの夕食を採り、その晩再び香港へ戻り3日目を終えました。4日目は午前中自由行動となり、家族や会社の方のお土産を買われる方や、ウィンドウショッピングをされる方など時間の許す限り皆さん旅の最後を楽しまれました。成田空港到着、4日間の旅行会が無事終了したことを確認し解散となりました。今回の旅行は飛行機による移動が多くハードスケジュールでしたが体調を崩される方もなく大変有意義な時間を過すことができ、新川地区の親睦をよりいっそう深めることができました。最後に団長（地区長）である昌平堂印刷の伊森社長、幹事役の高千穂印刷小山専務をはじめ地区幹事の皆さん、そして参加されたすべての皆さんに楽しい旅行ができたことを感謝いたします。

（文―金山）

支部の動き

8月2日㈯中央区・印刷業DTP化促進セミナー
「D」コース（実務者向け）㈾グループ（10時～17時）
於・㈳日本印刷技術協会DTPルーム

8月21日㈭臨時部長・監査・地区長会（11時～13時30分）於・支部会議室
。本部・電子化教育研修会の件
。支部・永年勤続従業員表彰式開催の件

9月11日㈭本部支部長会（15時～）於・本部会議室　十文字支部長出席

9月16日㈫京橋支部・ステップアップPTP研修会「電子化教育研修会」「経営幹部セミナーコース」開催（13時30分～16時30分）於・中央区立女性センター　ブーケ21

9月17日㈬～20日㈯京橋支部・ステップアップDTP研修会「電子化教育研修会」「実務者トレーニングコース」開催（毎日10時～18時）於・パブリッシングトレーニングセンター

9月19日㈮本部「敬老の集い」（10時30分～）於・明治神宮

9月24日㈬京橋支部・ステップアップDTP研修会「営業マントレーニングコース」開催

9月26日㈮日本語組版DTPソフト「SMIエディカラー」研修会開催（15時～）於・支部会議室（詳細本文）

10月9日㈭本部支部長会（15時～）於・本部会議室　十文字支部長出席

10月14日㈫部長・監査・地区長会（11時～13時30分）於・支部会議室
。支部長会報告事項
。各種委員会報告事項（資材・総務・事務用・組織・出版・構改・小企業・商業）
。電子化教育研修会結果について
。永年勤続従業員表彰式について
。顧問・相談役・参与の会開催について
。その他の事項
1、「京橋の印刷」99号、100号の発行について
2、支部ホームページ開設について
3、今後の支部事業について
・新年臨時総会開設日・平成10年2月2日㈪
・平成10年度通常総会開催日・平成10年5月18日㈪

10月16日㈭京橋支部・永年勤続従業員表彰式開催（18時～）於・銀座東急ホテル

・司会　永井副支部長
・開会の辞　榎本副支部長
・挨拶　十文字支部長
・表彰
・来賓挨拶
東京都印刷工業組合副理事長　田畠　一弥殿
中央区長　矢田　美英殿
中央区工団連会長　平林　智司殿
・謝辞　高千穂印刷㈱　石井　淑人殿
・閉会の辞　山崎副支部長
・祝宴
・乾杯
東京都印刷工業組合常務理事　篠倉　正信殿
・中締　青柳副支部長

11月6日㈭中央区・京橋支部・日本橋支部・京青会との懇談会（12時～）於・支部会議室

11月15日㈯本部・永年勤続従業員表彰式（10時～）於・帝国劇場

11月18日㈫次期役員選考委員会（12時～14時）於・支部会議室、石澤顧問・小宮山顧問・小薬顧問・小山顧問・田畠顧問・神林相談役・篠倉常務理事・十文字支部長・榎本副支部長・児玉地区長以上10名出席

支部員の異動

脱退組合員
。八芳印刷㈱、布施芳久氏（新川地区）8月

慶事

。㈲美豊堂印刷所（築地地区）石井利昭殿長男御結婚（4月）

お悔やみ申し上げます

▼築地地区、㈲美豊堂印刷所社長御尊父、石井利夫殿御逝去（7月）
▼新川地区、松栄印刷㈱社長御母堂、飯塚スエ殿御逝去（7月）
▼八丁堀地区、カマタ㈱会長、鎌田　実殿御逝去（8月）
▼築地地区、㈱佐藤印刷所社長御母堂、佐藤　宜殿御逝去（8月）
▼八丁堀地区、㈱榎本印刷所会長、榎本栄七郎殿御逝去（9月）

編集後記

「利益供与事件の捜査は終結」、「宇宙飛行士の土井さん、自分の存在や宇宙の広がりに思い」いづれも11月27日付日経新聞の見出し、記事に書いてあったものです。金融システムの動揺が続いている最中、宇宙の彼方から聞えて来る土井さんの声、映像は〝砂漠の中でのオアシス〟のような気分にさせてくれました。

「京橋の印刷」次号は100号です。無限に広がる宇宙のように印刷業界も夢多く広がって行くことを期待したいものです。（横田）